二つの刺青

野村胡堂

一

「親分、大変な者が来ましたよ」
「何んだ？　今さら借金取なんかに驚く柄(がら)じゃあるめえ。ズイと通しな」
「女ですよ、親分」
「女に驚いた日にゃ、叔母さんに小言を言われる度に眼を廻さなきゃなるまい」
「それも唯の女じゃねエ、両国で江戸中の人気を湧き立たせている娘手品師のお関――良い女ですぜ」
「馬鹿野郎、涎(よだれ)を拭いて丁寧に通すんだ。いつまでも大玄関に立たせて置くと、お客様が夕立に流されるぞ」
「へッ、大玄関は嬉しいね」
　ガラッ八は泳ぐような足取で入口に引返しました。この掛合いが、平次のいわゆる大玄関まで筒抜け、ちょうどその時追っ立てるようにザーッと一と夕立来ると、一と打二た打眼を射る猛烈な稲光り、弾(はじ)くような雷鳴が、押っ冠せてガラガラッと耳をつん裂(ざ)きます。
「あっ」
　その雷鳴に尻を引っ叩かれたように、ズブ濡(ぬ)れの女が一人、会釈もなく飛び込んで来ました。尤も格子を開けて障子を押し倒して、取次の八五郎を突き飛ばせば、もう厭も応もなく平次と顔を合せなきゃなりません。

「御免下さい、親分。私はあんまりびっくりして」
女は敷居際にヘタヘタと座ると、単衣(ひとえ)の袂(たもと)でいきなり自分の襟やら首やらを拭いております。年の頃は二十歳か二十一、白粉ッ気はありませんが、表情的で仇っぽくて、身のこなしが滅法艶(なま)めかしい上、少し大きい顔の造作も、舞台馴れた人によくある不思議な吸引力を持っております。
「たいそう物驚きをするじゃないか。俺はまた綺麗な雷獣が飛び込んだのかと思って胆(きも)をつぶしたよ」
「あれ、親分」
お関はさすがに極り悪そうでした。
「ところで何んの用事で飛び込んで来たんだ。まさか雨宿りじゃあるまい」
「え、大変なことが起りました。ぜひ親分のお力を拝借して――」
「断って置くが、俺は喧嘩出入りと金のこと、それから色事に首を突っこむことは御免だよ」
平次は一服吸い付けて、大きく手を振りました。安煙草の烟(けむり)を払い退けでもするように。
「そんな気障(きざ)なんじゃありません。御存じでしょうが、私の妹分のお玉、――あの娘(こ)が見えなくなったのです」
「何？　お玉が行方知れずになったというのか」
それは両国中の見世物小屋を圧倒した、明星のような人気者でした。芸はさしたることはないにしても、その磨き上げられたような冷たい美しさが呼物になって、姉のお関以上に江戸中の人気をさらっていたのです。
「ですから親分」

お関は持前の弾力的な身体をくねらせて美しい指先をこう拝む形に合せたりするのでした。
「お玉は幾歳(いくつ)だえ」
「十八ですよ」
「親許は？」
「可哀想にそんなものはありません。あんな稼業をしている者は大抵そうですが」
「お前とは真実(ほんとう)の姉妹じゃなかったのだな」
「え」
平次は忙しく煙草を詰めて二三服立てつづけに喫(す)うと、夕立の後で庭へ出て来る蟇蛙のように、後ろ手を突いて大きく息をしました。
「どうでしょう親分」
「あの容貌で十八で、頼りになる親がないと来ると、卦(け)の面は恋と出るな」
「飛んでもない親分」
「先刻(さっき)も言う通り、色事に十手は禁物だ。こいつは御免蒙った方が無事らしいぜ」
「そんな気障なんじゃございませんよ。歳こそ十八ですが、玉ちゃんはからっきしねんねで、男と聴くと、木戸番の爺(とっ)さんに声を掛けられてもイヤな顔をするんですもの」
「当てになるものか、小娘と何んとやらだ」
「ね、親分、本当にお願いでございます。私にできるだけのお礼はいたしますが」
「お礼付の仕事なんかは真っ平だよ」

「本当の姉妹ではないけれども、私はあの娘が可愛くて可愛くてならないんですもの。親分、この通り」

お関は濡れた肩を落して、畳の上へ華奢(きゃしゃ)な手を突くのでした。美しい眼が少しうるんで意気な鬘下(かつらした)が心持顫へます。

「何時(いつ)、何処からいなくなったんだ」

「ゆうべ、本所石原の宿から、フラフラと出た様子でございます。朝顔を染めた中形の浴衣を着たままで」

「何にか心当りはないのか」

「物心のつく前から、旅芸人の中で育って、親も兄弟も判らないのを苦にしていましたが、近頃何んでも、――私も素姓がわかるかも知れない――と燥(はしゃ)いだり、沈んだりしていました。私にしても覚えのあることですが、私達のようなものが、なまじ素姓の知れるのは本当に怖いことですねえ。どうせ大名のお姫様である筈はありませんが、万一悪い人の子だったりしちゃ――」

お関はそう言って濡れた襟をかき合せるのでした。ちょうどその時、

「銭形の親分さんのお宅はこちらで？」

五十年輩の親爺が息せき切って、危ない木戸を押し倒しそうに外から伸び上がりました。

「平次は俺だが――」

「あの、両国から参りましたが、お関さんがこちらへ見えませんか」

「お関さんはここにいるよ、何にか用事か」

「あ、爺さん、何んか急の用？」

掻き立てられるようなあわただしい空気に驚いて、お関も縁側

へ顔を出しました。
「大変ですよ、お玉さんが」
「えッ」
不吉な予感にお関は顫え上がりました。
「死骸が百本杭で揚がったんです。早く帰って下さい」
「本当かい、それは？」
お関はしばらく気抜けのしたように立ち尽しました。

二

百本杭は人の山でした。
「えッ、寄るな寄るな見世物じゃねエ」
露払いの八五郎に怒鳴り立てられると、弥次馬はパッと散って、その中心から町役人と土地の下っ引に護られた若い女の死体が現われます。
平次は静かに近づくと片手拝みに、しばらく眼をつぶって筵の端をそっと上げました。
「まア玉ちゃん」
それを掻きのけるように、飛び付いたのはお関でした。
「お前はまア、何んというむごたらしい」
ゆうべ着て出たままの朝顔の浴衣を着て、誰に持って行かれたものか帯はありませんが、見覚えのある赤い紐が、死骸を縛った荒縄と絡み合って眼に沁みるような痛々しさです。
「銭形の親分、御苦労様で」
町役人と下っ引は救われたようにホッとしました。銭形平次が

来さえすれば、この虐(むご)たらしいことをした下手人が今直ぐにも捕まりそうに思えたのでしょう。

陽は西に傾きかけて、雨後の清々(すがすが)しい川風が、衣袂(いべい)を吹いて妙に総毛立たせます。

海藻(みる)の黒髪が蠟色(ろういろ)の頬に乱れて、水を少しも呑んでいない水死人の顔は、妙に引緊って見えるのも、左の耳の下からふくよかな頬へかけて、石で打ったらしい大きい傷の痛々しさを引立て、身体に巻きつけた荒縄の暗示する、犯罪の恐ろしさを思わせます。

「お関もうよかろう。泣いている時じゃないぜ」

「ハイ」

平次に注意されて、お関は案外素直に立上がりました。

「傷は大したことはありませんね、死んでから付いたものと見えて、血も出ていない」

「もう少し念入りに調べて見なきゃ――」

町役人と下っ引達が冒瀆的(ぼうとくてき)に眼を光らせながらささやきます。

平次はその眼から娘の死骸を遮(さえぎ)るように、自分の身体で庇(かば)いながら弥次馬を見渡しました。

「ところで、これを見付けたのは？」

「私でございます」

中年輩の船頭風の男が顔を出しました。

「いつごろだ」

「昼頃で、ヘエー、夕立の来る少し前でございました。潮が引くと杭(くい)の間からこう白いものが見えましたので――」

「引っ掛っていたのだな」

「不思議なことに、ざっと縄の端を杭に縛ってありましたが――」

「縛って？」
平次はちょっと考え込みました。が続けて、
「娘手品のお玉とどうして判った」
「誰ともなくそんなことを申しました」
「誰ともなく――だな」
「へエー」
「親分、変なことがありますが――」
後ろからそっと袖を引いたのはお関でした。
「――」
振り返った平次は、お関の眼の中に、恐ろしく緊迫した、疑惑とも恐怖ともつかぬ色を読んだのです。平次は黙って群衆をかき分けるように、町の物蔭にお関を誘(さそ)い出しました。後のことは眼顔の合図で心得た八五郎のガラッ八が、精いっぱいの声を張りあげて、好奇の眼を光らせながら犇々(ひしひし)と娘の死骸を取囲む弥次馬を追い散らしております。
「何んだ、たいそう心配そうだが――」
「大変なことがあるんですが」
「早く言うがよい、どうしたというのだ」
「あの死骸は違っていますよ」
「何？」
「玉ちゃんによく似ていますが、玉ちゃんじゃありませんよ」
「それは本当か」
平次も驚きました。お関の言葉は、あまりにも予想外です。
「ちょっと似てはいますし、浴衣もちゃんと玉ちゃんのですけれど、――子供の時分からいっしょに育った私にはよくわかります。

玉ちゃんには左の耳朶の下に可愛らしい黒子がありますし、左二の腕に私と一緒にふざけて彫った、小さい小さい干支の巳（蛇）があるんです。これと対の――」

お関はそう言って、自分の二の腕を捲って見せるのでした。夕陽に透す位置になって、桃色珊瑚の美しい腕には、径ちょっとほどの可愛らしい卯（兎）が青々と彫ってあるのです。

「それは良いことを教えてくれた。礼を言うぜ」

「あら」

「その代りしばらく黙っていてくれ。曲者がお玉の浴衣まで着せた上、念入りに左の頬に傷を拵えて目印の黒子を隠し、お玉に見えるようにしたのなら、しばらくその術に乗ったことにして向うの出ようを見たい」

「――」

©2018 萩 柚月

「ところで干支（えと）の刺青（ほりもの）のことはみんな知っているのか」
「いえ――そんなことが知れると親方に叱られるんですもの、誰にも言やしません」
「それからもう一つ、お玉が自分の素姓が判るかも知れないと言ったのは何時のことだ」
「一と月ほど前のことでした――尤も何んか変ったことがあった様子で、一二度そんなことを言ったきり、何んにも言いませんでしたが、――あの娘は一体そんな片意地なところのある人で、気に入らないことがあると、いくら訊いても打ち開けてはくれなかったんです。――ただソワソワしているだけで」
平次はしばらく考え込みましたが、材料が少ないので一流の空想を築きあげようもありません。
「お玉は、何にか手廻りの物を持って行った様子はないのか」
「いえ、本当に浴衣を着たっきりです。大切にしていた赤い羅紗（らしゃ）の紙入まで置いて行ったくらいですもの」
「いずれお玉の手廻りの道具や荷物を見せて貰おう、――多分夜になるだろうが、――それから石原から代りの者が来たら、お前も帰る方がいいぜ」
「では親分」
二人はそれぎり別れました。

三

平次が両国の小屋へ行ったのはもう夜でした。皆んな石原の家へ引揚げて、小屋に残っているのは、昼のうち平次の家へ来た和

七という番人の爺やだけ。
「おや、親分さん、御苦労様でございます」
こんな稼業の人間らしくもなく、少し頑固(かたくな)らしく見えるほど、実体な男です。
「飛んだ驚きだったね、――ところで、いろいろ訊きたいが」
「へエへエ」
「小屋の景気はどうだい」
「たいそうな人気でございますよ、親分さん。尤も今日は休みましたが」
「お玉がいなくなったら、人気にも響くだろうな」
「へエ、少しは響きますが、でも、お関さんがいらっしゃれば、大したことはないと思います。容貌(きりょう)はお玉さん程でなくても、あの愛嬌で人気を呼びますから」
「お関とお玉は仲が好かったのか」
「羨ましいほどで、――みんな真実(ほんとう)の姉妹と思っております」
「二人の気風は？」
「雪と墨で、へエ」
「何方が雪で、何方が墨なんだ」
「お関さんの方は大ざっぱで、気前がよくて、そのくせ涙もろくて、お玉さんは細かくて、念入りで、油断がなくて――まあ、そんなことでございますよ」
和七は巧(たく)みに話を外らせました。
「身持は？」
「こんな稼業の女にしちゃ、二人とも嘘みたいに固い方でございます。――尤もお関さんには馬道の伊之助さんという、言い交し

たのがありますが、伊之さんは親がかりだし、お関さんはまだ借金が残っているし、自由にならないんで、可哀想ですよ」

「何んだい、その伊之助というのは？」

「米屋の息子で――でも二人の仲は誰知らぬ者はありません。お関さんはまた伊之さん一本槍で見掛けに寄らないあの人は貞女ですね」

「お玉は」

「あれは泥で拵えた上できの人形ですね。あんなに綺麗なくせにこれんばかしも色気というものはありません、――その癖真は悧巧なんですが――」

和七爺やの話はなかなかよく要領を尽します。

「ところで二人の楽屋を見せて貰おうか」

「楽屋という程のものじゃございませんが、御覧下さいまし」

和七爺やはそう言いながら、行燈を提げて、案内しました。それは乱雑な道具の中に二面の鏡を据えただけの、ほんの形ばかりの小さい化粧部屋ですが、さすがに若い娘二人の生活が匂って、何んとも言えない艶めかしさがあります。

「これは？」

「お関さんの鏡台ですよ」

一つの抽斗の中は白粉と紅と少しばかり紙が滅茶滅茶に入っているだけで、もう一つは櫛やらすき毛やら少し汚ならしく詰め込んで男が見て気持の良いものではありません。

「此方はお玉のだね」

「へエ――」

これはまた綺麗過ぎるほどよく片付いて、紙一枚散らばってはは

居らず、こぼれた白粉までていねいに拭き清めてあります。
そこから石原の宿へ、平次は、物を考えながら辿りました。夜はもう戌刻（八時）を過ぎたでしょう、西の空のほの明るさも消えて、江戸もこの辺は宵ながら真夜中の風情さえあります。
娘手品の親方は近江金十郎という五十男で、仲間では顔の通った方ですが、それよりも女房のお角は、名前の通りの四角な顔と、恐ろしい勢いでまくし立てる塩辛声とで、東西両国の香具師仲間でも、一番煙たがられている四十女でした。
「おや銭形の親分さん」
金十郎が晩酌の膳を押しやって、あわてて大肌脱ぎを入れるのを、
「まア、いいよ。そのままで話してくれ」
そんな気軽なことを言いながら、上り框で煙草入を抜く平次だったのです。
「仏様はいつ引取れることになりましょう。何んと言っても長い間よく稼いでくれたお玉ですから、できるだけのことはしてやりたいと思いますが」
金十郎は今まで一肌脱ぎで道化の銅作という三十男を相手に晩酌をやっていたのも忘れたように、こんな神妙なことを言うのです。
「まだ、お調べが残っているのだ、――明日のことだろうよ」
そのお玉の死骸が全くの人違いとも言えず、平次はこんなことを言うのです。百本杭に残った八五郎に耳打ちして、係り同心にはその旨を含んで貰ったことは言うまでもありません――が。
「ところで、お玉の身許を訊きたいが」

平次は大事なことをきり出しました。
「十七八年前でございました。原庭のお豊さんという取上婆さんが、お誕生が過ぎたばかりの女の児を抱いて来て、引取手のない可哀想な子だからと、私どもへ預けて行きました。いずれ若旦那と奉公人か、芸子と客の間にできた子でしょう」
「身許がわかるような品物とか書き付けとか、そんな物はなかったのかな」
「何んにもありゃしません。小倉の色紙(しきし)とか何んとかの懐剣でも付いていると御大層なんですが」
塩辛声のお角は注(ちゅう)を入れるのでした。
「お関の方は？」
「お玉よりは丸二年も早かったのですから、今年でちょうど二十年になるでしょう。これは百日経ったか経たないかと思う女の児を背負(しょ)い込んで、それから舞台に立つまで十年近くも丹精しましたよ。一本立の芸人にする仕込みは、並大抵のことじゃありません」
金十郎は弁解らしくそんなことを言うのです。
「親許はわかっているのだな」
「いえ、あれは棄児(すてご)で」
「棄児？」
「大晦日(おおみそか)の晩大川橋の袂(たもと)に捨ててあったのを、物好きに家の人が拾って来ましたよ。これはお玉と違って、男物の赤合羽(あかがっぱ)一枚に包んだきり、着物も金も付いていたわけじゃありません」
「そう言うとお玉の方には着物も金も付いていたように聴えるが――」

「金が五両に、着物が二枚、――大したものが付いていたわけじゃございません。原庭の取上婆さん、――もう七十でしょうが、あのお豊さんはまだ達者ですよ。あの人に訊いて下さればわかります」

「いや、そんなことでいいだろう。ところで肝心のお関さんが見えないようだが」

平次はあまり広くない家の中を見廻しました。金十郎夫婦の外には、道化者の銅作と雇婆さんが一人いるだけ。そこにはお玉と共に美しさと魅力を撒き散らさずには措かぬ、あのお関の明るい姿が見えなかったのです。

「お関はまだ戻りませんが」

「え？」

「あの大夕立の前に出たっきりですよ」

道化の銅作は注を入れました。舞台では鼻の下に二本の白い棒を描いて、お関とお玉にからかわれてばかりいる間抜けですが、素顔は三十五六の小気の利いた男前です。なるほど道化は馬鹿にはできない――忙しい中にも平次はそんなことを考えております。

四

お関は消えてなくなりました。平次は百本杭へ飛んで行きましたが、お玉と見せかけた若い女の死骸の身許はまだ判らず、番屋で神妙に死骸の番をしているガラッ八の八五郎を誘い出すと、半分は自分へ言い聴かせるようにこう言うのでした。

「容易ならぬことだ、一と晩くらいは寝なくったって生命に別状はあるめえ。お前は原庭のお豊という取上婆さんを訪ねて、十八

年前に金十郎夫婦に預けた女の児の親許を訊き出し、――それから大川橋の橋番所へ行って二十年前に橋番をしていた人が生きているならそれを捜し出して、二十年前の大晦日の晩に、橋の袂に赤合羽一枚に包んで棄ててあった棄児のことを念入りに訊き出してくれ。いいか――ここは下っ引に頼んでいい」

「親分は？」

「馬道の米屋へ行くよ。お関と言い交した相手は、伊之助とか言ったな」

平次と八五郎は西と東に別れました。もうやがて亥刻半（十一時）でしょう、按摩の笛の遠音も止んで、江戸の家並は大地にメリ込むように更けて行きますが、二人の若い女の生命の鍵を託された銭形平次に取っては、もはや時刻の観念などはありません。

馬道の米屋――越後屋の伜伊之助は、銭形平次に月下の往来に呼出されて、真夏の夜に胴顫いをしておりました。江戸中に響き渡った御用聞に調べられていると思う緊張感と、もう一つは、二世も三世もと、浄瑠璃の文句のようなことを、大真面目に言い交した、娘手品のお関の身の上を案じての疑惧に囚えられていたのです。伊之助は二十五六の月の光の下で見るせいか、この上もなく夢幻的で、この上もなく浪漫的な男でした。お関のような気性者が、よくもこんな男と――と思うのは、第三者の冷酷な批評で、恋に盲目になった若い娘に取っては、この頼りない若旦那型がこの上もなく魅力的に見えるのでしょう。

結局四半刻（三十分）もいろいろのことを訊いて、平次の摑んだことと言っては、――お関と伊之助は一年も前から親しくしていたこと、――恋するものの分別で、無理な逢う瀬は作っている

が、お互にこの行詰った境遇を打開して一緒になる目当ては殆んど付いていないこと――伊之助の父親の伊兵衛は、人並すぐれた頑固(がんこ)者で、両国の手品の娘などを、跡取息子の嫁にすることなどは、絶対に考えられないこと、――でも二人はどうしても別れられないこと――。

「そして、添い遂げられなかったら、二人は死んでしまいます。親分さん」

そう言って月に振り仰いだ伊之助の顔は、痛々しくも濡れているのでした。

この無力で熱烈で、どこまでも無分別と臆病とで動いて行く恋の闘士の、夢みるような悲嘆の顔を見ながら、

「お関の行方は判らないんだぜ。今頃は殺されているかも知れないよ。何にか心当りはないのか、え？」

平次は最後の問い――答えのない問いを投げかけて切上げる外はなかったのです。

ともかくも神田の家へ帰って、恋女房のお静に遅い晩飯の仕度をさせていると、ガラッ八の八五郎もさすがにヘトヘトになって戻って来ました。

「親分。あのね、お豊という取上婆さんには弱りましたよ。すっかり耄碌(もうろく)して何んにも判らないが、扱った子供のことなら、書いたものがあるから明日の朝来てくれ、十七八年前のものでは急には見つからないし、夜は眼が悪くて見えないから――と言うんで」

「橋番は」

「大川橋の橋番を三十年も勤めた喜之助という親爺はこの春死にましたよ。二十年前の大晦日の晩に、赤合羽(あかがっぱ)に包んだ棄児(すてご)のこ

とは、よく話していたそうです――それっきりのことですが」
「それっきりは心細いが、あとは明日のことにしよう、――御苦労御苦労」
「へエー」
「明日はうんと早く百本杭へ行ってくれ。あの水死人の見知りの者が出て来ないとも限らないから」
八五郎は夜半過ぎの月下の街を向柳原の叔母の家へ帰って行きました。

五

「さア、大変だ。親分」
ガラッ八の八五郎が旋風のように飛んで来たのは、その翌る日の朝です。
「お関がどうかしたのか」
平次は一と晩悩んだ不安をツイ口に出したのです。
「百本杭に引掛っていましたよ」
「死骸になってか」
「ひどく撲たれて目を廻した様子で、幸い水を呑まなかったと見えて虫の息がありますが」
「助かるか」
「命だけは取止めるかも知れません」
「有難い」
平次はすぐ飛び出しました。が、近所の本道（内科医）の家に担ぎ込んだお関の容体を見ると、あんまり安心はしていられませ

ん。

「水を呑む前に目を廻したから、幸い溺(おぼ)れ死ぬのは助かった。それに夜半過ぎからは引潮で、見付けた時は、顔だけでも水の上に出ていたそうだ。運がよかったのだな――尤も撲たれた頭の傷は少し手重(ておも)だが――」

老医はそう言いながら、まだ何方(どっち)のものとも判らぬお関を介抱しているのでした。つづいて原庭の取上婆さんのお豊を見張っていた下っ引が、少しあわて気味に帰って来ました。

「銭形の親分、飛んだことになりました」

「どうしたのだ」

「お豊婆さんは昨夜死んでしまいましたよ」

「えッ」

「七十幾つとか言っても、まだ飛んだ達者な婆さんでしたが、夜(よ)更(ふけ)に急にお産があるという使で出かけたっきり、堀へ落ちて死んでいたのを、今朝になって見付けたんで、――隣町のお産なんか嘘でしたよ」

「そいつは大変だ。八、大急ぎで行って、婆さんの書いたものをみんな押えろ。覚え書か何にかあるに違げえねえ」

「合点」

八五郎は飛んで行きました。が、これもしかし軈(やが)てぼんやり帰って来るほかはなかったのです。

「駄目だ、親分。一と足先に、婆さんの娘に逢って、小判で、五両と投げ出して、――私はお豊さんの昔の弟子だが形見に欲しいから――と、婆さんの書いたものを洗いざらい持って行った女がありますよ――若い、顔中膏薬(こうやく)を貼った女だったそうで」

「何んということだ」

平次は地団太を踏みますが、こう後手後手と廻っては、誰を怨みようもありません。

平次の敗北は見事でした。お玉の替玉を殺し、お関を危うくし、さらにお豊婆さんを殺した曲者は、いったい何を企らみ、何を仕出かそうとするのか。その見当も付かず、全く手を拱いて、次に相手の打つ術を待っている外はなかったのです。

「八、ゆうべ、石原の金十郎の家で、誰か外へ出た者はないか、念入りに調べてくれ。それからこれは下っ引でいいが――馬道の米屋――越後屋へ行って、若旦那の伊之助が何うしているか、それも訊いて来るんだ、――抜かるな、相手は容易でないぞ」

「へエー」

八五郎が飛び出した後、平次は大川橋の橋番へ行って、去年死んだという橋番喜之助の伜喜太郎を捜し出しました。それを捜し出すまでには、半日かかりましたが、それでも竹町で錺職人になっている、正直者らしい喜太郎に逢った時は、平次は何んとなくホッとした心持になっていたのです。

「二十年前の話だが、大晦日の晩の雪の中に棄ててあった女の児のことを、お前は親父さんから訊いたことがあるだろうと思うが」

「え、あの大人の赤合羽に包んで棄ててあったという、――」

「その話を詳しく訊きたいが。実は雪の降る大晦日の晩に、生れたばかりの赤ん坊を、赤合羽に包んで橋の袂に棄てるというのは腑に落ちないことだ。どんな鬼でも蛇でも、赤ん坊を雪の中に棄てる時は、襤褸でも何んでも温かいものを一枚は着せるだろうと思う。何うだろう、――この話にはきっと深い仔細があるに相違

ない。そのことから現に今三人の命にも拘わるという大変なことが持上がっているんだ。父親が亡くなった今となっては、もう遠慮はあるまい。真実のことを詳しく話してはくれまいか」

平次の問いは厳重で周到でしたが、折入った丁寧さがありました。

「みんな申上げましょう。親父が生きているうちは、厳重に口止めされたそうですが、私の代になってまで、二十年も昔の義理を守って、人様に迷惑を掛けちゃ済みません。実は親分――あの赤ん坊は、最初立派な紋服を着せて金襴の守袋と、小判をうんと入れた財布を付けて捨ててあったそうですよ」

「え？」

「どこかの武家風のお女中が、供の者に抱かせて来て、棄てる時紋服の紋所だけは鋏で切取って行ったそうです。するとその後から一人の中間者が来て、赤ん坊をすっかり剥いだ上、自分の赤合羽一枚だけ着せて雪の上に投り出し、紋服も守り袋も持って行こうとするから、橋番をしていた親父がびっくりしてとがめると、小判で二十両入っていた財布をくれて――これが口止料だ。余計なことを言うとお前の命がないと思え――と言ったまま姿を隠したんだそうです」

話は全く予想外ですが、平次の胸には始めてこの恐ろしい疑問を解く緒口が見付かりました。

「その後へ金十郎が来て、赤合羽に包んだ赤ん坊を拾って行ったのだな」

「その通りですよ。金十郎はこの子は眼鼻立が良いから育て甲斐があるだろう――と言ったそうで」

「赤ん坊の紋服の紋を見なかったろうか」
「女中が切り取る時チラと見たそうです、――恐ろしく珍らしい紋だったと言いますよ。何んでも盃(さかずき)を三つ三角に並べたような――」
「有難う、それで解ったよ」
平次の声は七月の空に晴々しく響きました。

六

盃三つ並べた不思議な紋は、旗本武鑑を見るまでもなく、上野山下に屋敷を持っている三千五百石取の旗本三杯(みつき)竜之助の外にあるわけはありません。その当時三杯竜之助が一カ月前に老病で急死し、跡取り息子は早世して家を継ぐ者がなく、死後養子のことで喪(も)も秘して揉めているということがやがて平次の調べで判って来ました。
一方ガラッ八の調べで、お豊とお関が襲われた晩、金十郎の家を脱出したのは、道化の銅作と判って、これもその日のうちに御手当になったことは言うまでもありません。
越えて翌る八月の五日、亡くなった三杯竜之助の甥(おい)、同苗宇三郎の屋敷から、竜之助の忘れ形見、お玉というのが三杯家に乗込んで来るところを、道に擁(よう)して銭形の平次とその子分の八五郎が食い止めました。
宇三郎は小身者ですが、それでも二本差には相違なく、町方の御用聞風情が差出がましく、彼れこれ言う筋では、なかったのですが、日頃平次に眼を掛けている筆頭与力笹野新三郎が乗出して

お玉の化の皮を剥ぎ、三杯家の浮沈にも関わる危機一髪のところを救って、辛くも事件は解決しました。

三杯家の真実の血筋を引いたのは、曽て二十年前の大晦日の晩、大川橋の袂に赤合羽に包んで捨てられた、お関だったことは言うまでもありません。

だが、ようやく身体がもと通りに治って、銭形平次のところに引取られたお関は、真っ向から三杯家に引取られることを拒みました。

「真っ平御面蒙るわ。いくら奉公人の腹にできた子で、奥方の嫉妬がうるさいからって、生れて百日も経たない赤ん坊を、赤合羽に包んで雪の中へ捨てるようなそんな薄情な家へ誰が帰るものか。甥の宇三郎の細工かは知らないが、私はそんな家風は大嫌いさ、――そのために三杯家が潰れるんなら器用に潰しゃいいじゃないか。馬鹿馬鹿しい、三千五百石が何んだえ」

頑として頭を振るお関の胸のうちには、越後屋の若旦那伊之助の俤が息づいているのでした。この娘手品の女が、三千五百石の大旗本の跡取りの権利を棒に振ったとしたら伊之助の父親も、さすがにやかましいことはいわないでしょう。

× ×

お玉は銅作、宇三郎と処刑されました。万事落着した後で平次は八五郎のためにこう説明してくれたのです。

「宇三郎は三杯家の跡取りがなくなると、昔の自分の指金で捨てさせた三杯家の娘を捜させたのさ。娘手品師になっていると直ぐわかったが、お関とお玉が同じように綺麗で、ちょっと見当が付かない。そこで先ず何んとなく上品で美しいお玉に当って見ると、

こいつは飛んだ大伴の黒主で、すぐ宇三郎に食い下がって、年の違いも忘れて妙な仲になってしまった。――尤も後でお関の方が真物だと解ったが、宇三郎にして見れば、お玉を担ぎ出せば、本家横領の足掛りになる」

「へエー、太てえ奴ですね」

「ところで、お玉を見世物小屋からつれて行くと世間の口がうるさい。その噂の種を封じるつもりで、幸い神奈川在から来ている親なしの女中が急死したのを、お玉の身代りに百本杭へ投り込んだ。あれはお今とか言う可哀想な娘だが、不思議によくお玉に似ていたので、悪人どもの道具に使われたのだよ。お屋敷方の女中で、親元がないんだから、死骸を大川へ投り込んでも、これは知れっこない――尤も病死と解ると面白くないから。荒縄なんかで縛って殺されたように見せかけた」

「へエー」

「その上、死骸の耳の下に傷を拵えて、お玉の黒子を誤魔化したが、二の腕の巳（蛇）の彫物をお関に見られて、企らみに亀裂が入った。あの彫物は二人の干支だから、歳を繰って見ると二十年前に捨てられたお関の卯（兎）の彫物が三杯家の娘に間違いないわけだ」

「――」

「俺もさいしょは五里霧中だったが、手品の小屋で二人の鏡台を見た時、お玉の方があんまりよく片付いているので、これは用意をして逃げたのだな――と判ったよ。銅作が相棒とは気がつかなかったが、お関を殺しかけた晩に取上婆さんを殺したのは、どうせ一人の仕事ではない。――お関を殺そうとしたのは矢っ張りい

ろいろのことを知られているからだよ。それに二の腕の彫物が物を言うとお関の方が三杯家の血筋とすぐわかるじゃないか」

「ひどい女ですね」

「あのお玉は、綺麗で冷たくて勘定高いから、小屋で育って十八になっても、下らない男には迷わないが、勘定づくでは年の三十も違う宇三郎に喰い下がったり、鼻の下に胡粉(ごふん)で二本棒を描く男も迷わせる。――一方お関は正直者で夢中になると三千五百石くらいは朝飯前に振りとばす」

「そのお関はどうなるでしょう」

「心配するなよ、今では越後屋の嫁になるのばかりを楽しみにしているよ。あの通りお静が手伝って、せっせと嫁入支度だ」

平次はそう言いながら、隣の部屋でせっせと針を動かす二人の若い女の幸福な姿をそっと指でさすのでした。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「オール讀物」昭和二十一年十月号　文藝春秋新社

底本―「銭形平次捕物全集」第八巻　河出書房　昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行　銭形倶楽部